ジョン・サンドフォード

真崎義博＝訳

John Sandford

MIND PREY

心の獲物

早川書房

心の獲物

真崎義博 訳

江苏工业学院图书馆
藏书章

Hayakawa Novels

訳者略歴　1947年生，明治大学英文科卒，英米文学翻訳家　訳書『獲物の眼』『夜の獲物』ジョン・サンドフォード，『潜行』スチュアート・ウッズ，『ホッグ連続殺人』『視聴率の殺人』ウィリアム・L・デアンドリア（以上早川書房刊）他

心の獲物

1997年11月20日　初版印刷
1997年11月30日　初版発行

著　者　ジョン・サンドフォード
訳　者　真崎義博
発行者　早川　浩

発行所　株式会社　早川書房
東京都千代田区神田多町2—2
電話　03－3252－3111（大代表）
振替　00160－3－47799

印刷所　中央精版印刷株式会社
製本所　中央精版印刷株式会社

定価はカバーに表示してあります
ISBN4-15-208120-1 C0097
Printed and bound in Japan
乱丁・落丁本は小社制作部宛お送り下さい。
送料小社負担にてお取りかえいたします。

心の獲物

日本語版翻訳権独占
早 川 書 房
© 1997 Hayakawa Publishing, Inc.

MIND PREY

by

John Sandford

Copyright © 1995 by
John Sandford

Translated by
Yoshihiro Masaki
First published 1997 in Japan by
Hayakawa Publishing, Inc.
This book is published in Japan by
arrangement with
John Camp
c/o International Creative Management, Inc.
through The English Agency (Japan) Ltd.

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

登場人物

ルーカス・ダヴンポート……ミネアポリス市警副本部長
ジョン・メイル……精神病者
アンディ・マネット……精神科医
グレイス……アンディの長女
ジュヌヴィエーヴ……アンディの次女
ジョージ・ダン……アンディの夫
タワー・マネット……アンディの父
ヘレン……タワーの妻
ナンシー・ウルフ……アンディのパートナー
ウェザー・カーキネン……外科医
バリー・ハント……コンピュータ・ゲーム会社の責任者
アイス……コンピュータ・プログラマー
エル・クルーガー……修道女
シンディ・マクファーソン……ゲーマー
グロリア・クロスビー……シンディの知人
ローズ・マリー・ルー……ミネアポリス市警本部長
マーシー・シェリル
ボブ・グリーヴ
スローン
……ミネアポリス市警刑事

1

午後おそくなって風雨が強まり、もつれあった汚いスウェット・ソックスが洗濯かごからあふれるように湖の空に厚い灰色の雲が押し寄せてきた。冷たい風が湖岸のニレやカシやカエデの木々から葉を吹き飛ばしている。ホワイトフロックスとオオハンゴンソウは風のまえにその項を垂れている。

早すぎる、夏の終わり。

ジョン・メイルは、混合ガソリンや干からびた小魚やコケの臭いが漂うアーヴの貸しボート屋の浮き桟橋を歩いていた。うしろからはすり切れそうなギャバジンの服のポケットに両手を突っ込んだ老人がついてくる。ジョン・メイルは古い機械類――チョーク、点火プラグ、キャブレターといったもの――についてはほとんど何も知らなかった。ダイオードや抵抗器や半導体のよしあしならわかる。しかし、ミネソタではボートに関する知識などは遺伝子に組み込まれているものと思われている。ジョンソン製九・九馬力の船外機がついた十四フィートのランドを借りるのはいとも簡単なことだった。運転免許証の提示と二十ドルの保証金ですぐに借りられた。

メイルはボートに乗り、ベンチシートの薄い水の膜を手で拭うとそこに坐った。アーヴはボートの横にしゃがみ、エンジンのかけ方と止め方、加速の仕方と方向転換の仕方を説明した。説明は三十秒で終わった。やがて、ゼブコの釣竿と赤いプラスティックの空の釣り道具箱をボートに積んだジョン・メイルは、ミネトンカ湖へと乗り出していった。

「日のあるうちに戻って来いよ」アーヴが大声で言った。桟橋に立ったその白髪の老人はゆっくりと遠ざかっていくジョン・メイルを見つめていた。

メイルがアーヴの桟橋を出たころは西の方がいささかあやしげではあったが空も晴れ、夏らしい澄んだ空気だった。こっちへ来るようだな、彼は思った。木々の輪郭の陰に何かが潜んでいる。だがかまうものか。そんな気配がするだけだ。

彼は東へ、北へと三マイルほど進んだ。大きな屋敷が並んでいる。何百万ドルという石やレンガの建物と水際まで広がる手入れの行き届いた芝生。その芝生には職人の手に

なる花壇が切手のように点在し、あいだを縫うように人造玉石を敷いた小道がくねくねと作られている。石の白鳥と石膏のアヒルが芝生を泳いでいる。

湖からだと何もかもがちがって見えた。メイルは行きすぎたかなと思ったが、まだ目的の家は見つかっていなかった。やがて、思っていたよりかなり北の方に、この付近の目印になっている風変わりな城館が目にとまった。そして湖岸沿いに一軒、二軒、三軒目、そう、目的の家があった。石とガラスとヒマラヤスギでできた建物、赤い屋根板、屋根の向こう側にかろうじて見える大きなプンゲントウヒの街路樹の先端。芝生の斜面には板石で土留めをした花壇があり、そこには赤、白、青という星条旗の色に配色したペチュニアが愛国心の象徴のように咲いている。浮き桟橋の横のボートリフトにはボートが一隻載っていた。

メイルはエンジンを切り、自然に止まるにまかせた。嵐はまだ木々の陰に潜み、風もやんでいる。釣竿を手にするとリールから釣糸を引き出し、ガイドを通して先端から垂らした。そして重りも針もつけずに手にいっぱいになるほど糸を引き出すとそれを湖面に放り投げた。糸はこんがらかって水面に浮いていたが、かまいはしなかった。釣り人に見えさえすればいいのだから。

メイルは堅いベンチシートに坐り、背中を丸めて家を見つめた。何かが動くような気配はまったくなかった。やがて、彼は夢想をはじめた。

メイルはこれが得意だった。スペシャリストといってもいい。彼は何度か罰として閉じ込められたことがあり、そのときは本も、ゲームも、テレビも許されなかった。閉所恐怖症の彼は――大人たちはそれを知っていて罰のひとつにしていたのだ――心のバランスを保とうと夢想に逃げ込んだ。簡易ベッドに坐り、味気ない壁に向かい、心のなかでめくるめくセックスと情熱の炎のフィルムを上映していた。

アンディ・マネットは最初のころのフィルムでスターを演じていた。やがて登場することも少なくなり、この二年間はほとんど姿を消していた。メイルは彼女のことを忘れかけていた。が、あの電話があり、彼女がカムバックしたのだった。

アンディ・マネット。彼女の香りは死者でさえ興奮させてしまう。細いからだ、くびれたウェスト、透きとおるように白い大きな胸、黒髪を小さな耳のうえでまとめたときにうしろから見える優雅な首筋。

メイルは目を開けて水面を見つめた。釣竿がボートの横から突き出ている。心のなかに、暗い部屋をシルクのローブを脱ぎながら彼に近づいてくる彼女の姿が浮かんだ。メ

イルは笑みを浮かべた。彼女に触れるとその肌には温もりがあり、滑らかで非のうちどころがない。指先に彼女を感じた。「さあ、やるんだ」彼は大声で言い、くすくすと笑う。「もっと下だ」そして……

メイルは時折ぶつぶつと何か言いながら一時間、二時間と坐ったままだった。やがてため息をついてからだを震わせ、白日夢から覚めた。あたりの様子は一変していた。

灰色になった空は荒れもようで、低い雲が押し寄せている。風が吹き荒れ、こんがらかった釣糸が荒野を転がる枯れ草のかたまりのように飛ばされていた。湖のいちばん深いところには白波がたっていた。

そろそろ戻ろうか。

エンジンをかけようとうしろへ手を伸ばすと、彼女の姿が目に入った。白いドレスを着て出窓のところに立っている——三百ヤードも離れているのに、その姿はすぐにわかった。彼女独特の張りつめたような落ち着き。メイルは視線が合うのを感じた。アンディ・マネットには相手の心を読む能力が備わっている。相手の心を見透かし、隠しておこうとすることを言い当てるのだ。

ジョン・メイルは心のうちを読まれまいと目をそらせた。いずれ彼女を襲うことを悟られまいと。

アンディ・マネットは出窓のところに立ち、湖から家へ吹きつける雨を見つめていた。その向こうからは闇が迫ってくる。岸に近い芝生の窪みでは背の高いキョウチクトウが風に吹かれて何度もおじぎをしていた。週末までには散ってしまうだろう。沖にはアーヴのところで借りたオレンジ色の舳先のボートに乗った釣り人がいる。アンディがその釣り人に気がついたのは五時頃だったが、まだ何も釣れていない様子だ。湖底は養分のない泥に覆われ、彼女自身、桟橋で糸を垂れても魚一匹釣れたことがなかった。そのことを教えてあげてもよかったのだが。

見ていると、男はうしろを向いてエンジンをかけた。幼いころからボートに親しんできたアンディの目には、その動きから男は船外エンジンのついたボートには不慣れなように思えた——坐ったままエンジンをかけることもできないのだ。

男がアンディに顔を向けると、彼女はその目を感じた——ばかげてはいるが、なぜか知っている男かもしれないと思った。顔の輪郭もよくわからないほど遠くにいるのに。それでも、頭の形、目、肩、動作といった全体の雰囲気には覚えがあるような……

やがて男はまたスターターコードを引き、数秒後には片手で帽子を押さえ、もう一方の手で船外機のハンドルを握

って湖岸沿いに戻っていった。あの男に会ったことなんかないわ、アンディは思った。男の姿が雨にかすんでいった。

雲が押し寄せてきて、葉が落ちるのね、彼女は思った。

早すぎる、

夏の終わり。

アンディは窓から離れ、いくつもあるランプをつけながらリヴィング・ルームを歩いた。そこには温かみと落ち着きの感じられる調度品が置かれている――がっしりした田舎風のカウチや椅子、職人の手になるテーブル、ランプやラグ。シェイカー教徒の家具を思わせる木材と織物。柔らかな色調のなかにもところどころで大胆な色づかいをしている――アンティークなカエデ材のテーブルと調和するラグの鮮やかな赤、出窓から見える青い空を思わせるブルーの縞。

かつて、この家はいつも温かさに満ちていた。ジョージがいなくなったいまは冷たさを感じる。

ジョージがあんなことをしたこともあって。

ジョージは行動と情熱と議論の男だった。そして逞しさや、議論好きなところや、精悍な顔つきや、知的な目などからは、守ってくれているという安心感さえ覚えた。それがいまは……

アンディは細身で背の高い黒髪の女だった。無意識のうちに周囲の人々に気品を感じさせる。知らず知らずのうちにポーズをとっているようなことがしばしばあった。ポートレイトを撮るときのように脚と手の位置が自然にきまり、かすかに頭を傾げる。その髪型やパールのイアリングは、乗馬やヨットやギリシアでの休暇を物語っている。

そうしたことはアンディにはどうしようもないことだった。たとえ変えられたにしても、彼女は変えたりすまい。

暗さの増す家のなかをリヴィング・ルームのランプがほの明るくし、アンディは娘たちに明日の新学期の用意をさせ、服を選ばせ、早く寝かせようと階段をあがった。

階段をあがりきると娘たちの部屋のある右へ行きかけた――そのとき、反対側からポルノ映画の怪しげな声がかすかに聞こえてきた。

娘たちはスウィートになっているマスター・ベッドルームでテレビを見ているのだ。アンディが廊下を歩いていると急にチャンネルが変わった。ベッドルームに入ると、娘たちはCNNに見入っていた。二人のコメンテイターが消費者物価指数についてとりとめのない話をしている。

「パパ、ママ」ジュヌヴィエーヴが上機嫌な声音で言った。グレイスもアンディを見上げて微笑みかけた。母親と顔を合わせるにしてはいささかオーヴァーだ。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

「ハイ」アンディは言い、あたりを見まわした。「リモコンはどこ？」
「ベッドの上よ」グレイスがさりげなく答えた。
リモコンは二人の娘からは遠いベッドの中央にあった。慌てて投げたのね、アンディは思った。彼女はそれを手にし、「ちょっと失礼」と言ってチャンネルを変えた。ケーブル・テレビが、全裸の男女が絡み合うシーンを映し出していた。
「二人とも」アンディは叱るような口調で言った。
「ためになるのよ」見ていたことを否定しようともせず、妹が言い返した。「いろんなことを勉強しなくちゃ」
「こういう勉強の仕方はいけないわ」アンディは言い、テレビを消した。「知りたいことがあったら私のところへ来なさい」アンディが姉のグレイスに目を向けると、彼女は視線をそらせた――ちょっと怒っているような、同時にバツが悪そうな感じだった。「さあ、いらっしゃい」アンディは言った。「二人とも学校の用意をしてお風呂に入るのよ」
「またお医者さんみたいな話し方になってるわよ、ママ」グレイスが言った。
「ごめんなさい」
姉妹のベッドルームへ行く途中、ジュヌヴィエーヴが出し抜けにこう言った。「それにしても、あの男の人のあれって、ほんとうに大きかったわ」
衝撃の沈黙が一秒あり、グレイスが笑いだした。二秒後にはアンディも笑いだした。五秒後には三人とも廊下のカーペットに倒れこみ、涙が出るほど笑いころげていた。

雨は一晩じゅう降りつづいた。朝方に二時間ほどやんでいたが、また降りはじめた。
アンディは娘たちをバスに乗せ、病院には十分前に着いた。手際よく患者のリストを確認し、患者の話に耳を傾け、元気づけるように微笑み、ときに真剣な表情で話をした。自分は自殺をするのではないかという思いを捨てきれない女性。本当の自分は男で、女の肉体に閉じ込められているのではないかと思っている女性。家族の生活の細部まで管理しなければならないという強迫観念に取り憑かれた男性――そんな自分はまちがっているということはわかっているのだが、どうしようもないのだ。
昼休みになるとアンディは二ブロック先のデリまで歩き、自分とパートナーの昼食を買ってきた。二人は経理の者をまじえて社会保障制度や労働者災害補償制度について話し合った。
午後は別な患者と顔を合わせた。慢性鬱病の警官だが、

新しい薬物療法が効果をあらわしているらしい。ニコチンの臭いがぷんぷんとする陰気な青白い顔の男だが、その日は恥ずかしそうに彼女に笑みを向けてこう言った。「今週はこの五年で最高の一週間だったよ。いろんな女性の顔を見たからね」

アンディは早めにオフィスを出た。小糠雨のなかを環状線のウェストサイドへ向かい、ニューイングランド風の住宅街のなかのバーチズ・スクールの青々とした運動場まで車を走らせた。学校の駐車場を囲むサトウカエデの木々は赤い秋の色に染まりはじめている。入口までつづく木々はサニーゴールドに染まり、この陰鬱な日でも明るく迎えてくれているように思えた。

駐車場に車を駐めたアンディは急いで校舎に入った。濡れたアスファルトを、暖かい雨の匂いが霧のように覆っている。

父母会は例年のとおりだった――アンディは毎年、新学期のはじまる日の父母会に出席している。教師たちとことばを交わし、誰かれとなく笑みをふりまき、感謝祭の催しに協力することを約束し、オーケストラを呼ぶための寄付に小切手を切る。〝グレイスといっしょに準備をするのが楽しみなんですよ。彼女はとても活動的で聰明な子で、リーダー的存在なんです。なんとかかんとか、なんとかかんとか〟

アンディは父母会が楽しみだったが、終わるとほっとするのだった。

それが終わって娘たちと外へ出ると、荒れ模様の空から雨が激しく降っていた。「ねえ、ママ」玄関口に立つと、骨の折れた傘をさして歩道を足早に歩く女性を見つめながらグレイスが言った。大人と話すときのグレイスはいつも真顔になる。「今日の服はきれいだし、しわにしたくないから、ママが車をここまでもって来て。あたし、ここで待ってるから」

「いいわ」なにも三人が雨に濡れることはない。

「あたしは雨なんか平気よ」ジュヌヴィエーヴが元気よく言った。「行きましょ」

「グレイスといっしょに待ってたら?」アンディが言った。

「いやよ。グレイスは濡れるのが嫌なだけなんだから。魔女だから溶けちゃうの」

グレイスは妹と視線を合わせ、親指と人差指でつねるような仕草をした。

「ママ」ジュヌヴィエーヴが訴えるように言った。

「グレイス」アンディが叱った。

「今夜、あんたが寝たら」グレイスがつぶやいた。妹の扱い方はわかっている。

ジュヌヴィエーヴよりはるかに背が高く内気な十二歳のグレイスは、そろそろ大人のからだの線になりはじめている。まじめで、まるで差し迫る不幸を感じ取っているかのように陰気な、といってもいいほどの少女だった。将来は医者になりたいと思っている。

一方のジュヌヴィエーヴは負けず嫌いで陽気な、にぎやかな少女だ。とてもかわいい。まだ九歳なのに、誰もが男の子たちの競争は激しくなるにちがいないと言っている。まだ何年か先の話だろうが。ジュヌヴィエーヴはコンクリートに坐りこみ、テニスシューズの底をはがそうとしている。

「ジェン」アンディは言った。

「どっちにしてもはがれるんだもん」ジュヌヴィエーヴは顔もあげずに応えた。「だから新しい靴を買わなくちゃって言ったのに」

レインコートを着た男がうつむいて足早にやって来た。自称サイコセラピストで、PTAで活動的なデイヴィッド・ガードラーだ。うんざりするような男だった。〝人生における相応しい役割〟とか〝固有の振る舞い〟といったことを口うるさく言う。仕事にタロット・カードを使っているというわさもあった。彼がアンディに機嫌を取るような声音で話しかけた。「ドクタ・マネット」足をゆるめてうなずきながら言った。「ひどい天気ですね」

「ええ」アンディは答えた。育ちのせいで嫌いな男にもぶっきらぼうにはできない。「また一晩中降るそうですよ」

「そのようですね。ところで、今月号の《セラポディスト》はお読みになりましたか？　記憶回復の構造に関する記事がありまして……」

彼はとりとめのない話をつづけ、アンディが反射的に笑みを返すと、ジュヌヴィエーヴが大きな声で口をはさんだ。「ママ、遅くなっちゃうわよ」そこでやっとアンディが言った。「もう行かないと」しかし、育ちのせいでこう付け加えた。「必ず読んでみます」

「そうですね。それではまた」ガードラーが言った。

彼が校舎に入ると、ジュヌヴィエーヴがその姿を目で追いながらボガートのように口角から言った。「どう、ママ？」

「ありがとう、ジェン」アンディはにこにこしながら答えた。

「どういたしまして」

「それじゃ、車をとってくる」アンディは言い、駐車場の

方へ目を向けた。彼女の車の運転席側に赤いヴァンが駐まっていて、そのうしろをまわりこまなければならない。
「あたしも行く」ジュヌヴィエーヴが言った。
「あたし、前の席ね」グレイスが言った。
「あたしが前……」
「来るときはあんたが前だったじゃない、ゴキブリ」グレイスが言った。
「ママ、グレイスったらあたしのことゴキブリだって……」
グレイスはまたつねるような仕草をした。
「あなたは後ろに乗りなさい、ジェン。来るときはあなたが前だったんだから」
「さもないとつねるわよ」グレイスが言い加えた。
二人は雨のなかを小走りに車へ向かった。ローヒールをはいたアンディは小さなジュヌヴィエーヴと手をつないで走った。エコノライン・ヴァンのうしろをまわりこむと、アンディがジェンの手を放した。キーをドアに向け、電子ロック・ボタンを押した。雨の音にまじってロックが外れるカチャという音がした。
うつむいたままアンディはヴァンと車のあいだに入った。ジェンがそのうしろにつく。ドアのハンドルに手を伸ばした。
背後でヴァンのスライディング・ドアが開く音が聞こえた。人の気配と動きを感じた。振り向きながら自然に笑みを浮かべた。
ジュヌヴィエーヴの声がし、妙に丸い頭がアンディのほうへやって来る。薄汚いモップのようなブロンドの髪。若いのに顔にロードマップのようなしわがある。歯と唾と棍棒のような両手が目に入った。
アンディが叫んだ。「逃げて」
男が彼女の顔を殴った。
手の動きは見えたが避けられなかった。殴られた勢いで車のドアにぶつかり、ずるずるとしゃがみこんだ。膝がいうことをきかなかった。
感じたのは衝撃だけで痛みはなかった。顔への一撃とドアへの激突。向きを変える男と顔の出血を感じた。舗装の臭いがし、掌にざらざらした濡れたアスファルトを感じた。そして――ほんの一瞬だが――スーツが汚れる、と思った。離れる男の気配を感じた。
もう一度、「逃げて」と叫ぼうとしたが、呻くような声しか出てこなかった。そして、男がジュヌヴィエーヴに近づくのを感じた――目に見えたのかもしれない。また叫ぼうとした、何か言おうとした。鼻血が出ていた。顔に激し

い痛みを感じた。
遠くからジュヌヴィエーヴの悲鳴が聞こえ、立ち上がろうとした。手がアンディのコートをつかみ、彼女をもちあげると投げ飛ばした。金属に激突した。うつ伏せに倒れたアンディは起き上がろうとした。車のドアが閉まる音が聞こえた。
朦朧とした意識のなかで、アンディは倒れているジュヌヴィエーヴに気がついた。頭のてっぺんから爪先まで血に染まっている。アンディは目を輝かせて起き上がった娘に手をさしのべた。アンディはジュヌヴィエーヴに動くなと言おうとしたが、娘を赤く染めているのが血でないことに気がついた。何か別のものだ。ジュヌヴィエーヴがからだを離して叫んだ。「ママ、血が……」
ヴァンだわ、とアンディは思った。
二人はヴァンのなかにいた。それに気づいたアンディがひざまずくと、ヴァンが急発進してまた倒れこんだ。
グレイスが見ていたはずよ、彼女は思った。
アンディはもがくようにまたからだを起こし、また倒れた。今度はヴァンが左折してブレーキをかけたのだ。運転席側のドアが開いて光がさしこんできた。悲鳴が聞こえ、後部のドアが開いた。グレイスが頭から放り込まれ、ジュヌヴィエーヴに折り重なった。彼女の白い服も錆のような赤に染まっていた。
ドアが閉まり、ヴァンは駐車場を出た。
アンディはひざまずき、両腕を振り回しながらどういうことか考えようとした。グレイスは悲鳴をあげ、ジュヌヴィエーヴは泣いていた。二人とも赤いものにまみれている。
臭いと口に入った味で、アンディは自分が血を流しているのだということに気がついた。金網に隔てられた運転席にいる男に目を向けた。男に大声で言った。「停めて、車を停めて」が、男はそのことばを無視し、角を曲がって車を走らせた。
「ママ、痛いよ」ジュヌヴィエーヴが言った。アンディは四つんばいになっている娘たちに顔を向けた。グレイスは悲しそうな表情を浮かべている。いつかこの男に襲われるということがわかっていたかのように。
アンディは逃げられないかとヴァンのドアを見つめたが、ドアの把手がついていたところには金属板がネジ留めされていた。仰向けになって力まかせにドアを蹴ったが、びくともしなかった。長い脚で蹴りつづけた。グレイスとジュヌヴィエーヴも蹴りはじめたが無駄だった。ジュヌヴィエーヴが金切り声をあげはじめた。アンディは夢中で蹴りつづけた。やがて、彼女は喘ぎながらグレイスに繰り返し言った。「ここから逃げなくちゃ、逃げなくちゃ、逃げなく

ちゃ……」

ジュヌヴィエーヴの悲鳴をかき消すように、運転席の男が大声で笑いだした。そのカーニヴァルのときのような笑い声に、三人は黙りこんでしまった。リアヴュミラーに映る男の目が見えた。「逃げられはしないぞ。ドアの把手は外してあるんだからな」

はじめて男の声を耳にした三人は縮みあがった。天井の低いヴァンのなかでうずくまったアンディは靴をなくしていることに気づいた――バッグも。バッグは助手席に置いてあった。どうして助手席に？　金網にしがみついてからだを支え、踵で窓を蹴った。ガラスにひびが入った。

ヴァンが路肩に急停車し、男が振り返った。黒い四五口径を手にし、恐ろしい声で言った。「ガラスを割ってみろ、娘を殺すからな」

アンディには男の横顔しか見えなかったが、不意に思った。この男、知ってるわ。でも、ちょっとちがう。どこで会ったのかしら？　どこで？　アンディが床に坐りこむと、男はステアリングを握って車を発進させた。「ガラスを割ってみろ、割ってみやがれ」

「あなた、誰なの？」アンディが言った。

そのことばに、男はいよいよ怒りをつのらせた。〝誰、だと？〟「ジョンだ」男はざらついた声で言った。

「ジョン・誰？　目的は何なの？」

〝ジョン・誰、だと？　ジョン・誰、だと？〟「知ってるはずだ」

グレイスは鼻血を出していた。怯えた目をしている。ジュヌヴィエーヴは隅でうずくまっている。アンディはもういちど訊いた。「ジョン・誰？」

肩越しに振り返ると、男は憎しみにあふれた目を向けてブロンドのウィッグを取り去った。

一瞬ののち、アンディは言った。「そんな、まさか。ジョン・メイル」

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com